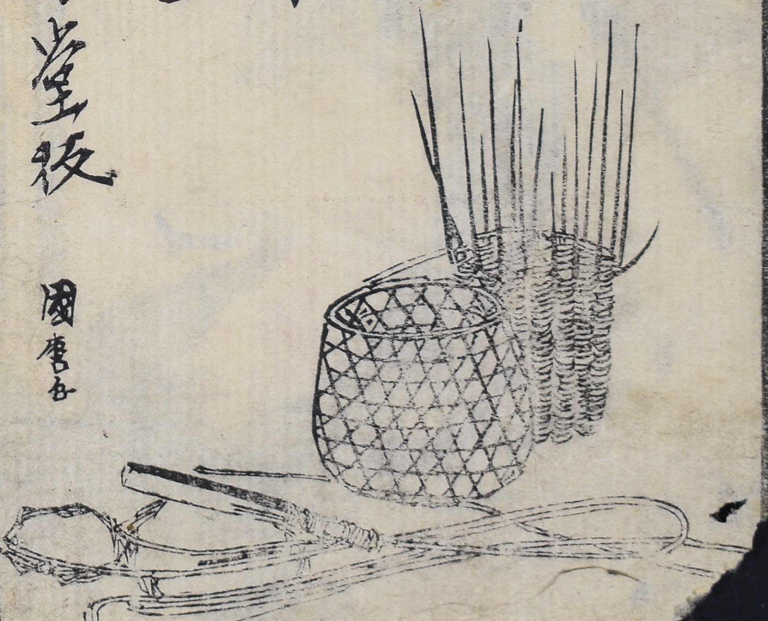
十編

升川ゝ里
十編下

京山作
豊国画

錦寿堂板



國麿書

竹取物語十編下

戌ノ春よりちゑつと上といふおん茶やまおもて
江戸本店通弐丁め京でん日本橋
男女老んにやく女わらべ茶▲うるとの中丹
補り兼く一方五匁半匁二匁五下男ハ
はらふ病のくとも世のき
はよくぞちゑつと久人ふ
薬さらひ卒り上さうるも
かくうるうちあかなるむ
とゐなりそへむふ
あてとあかつとのうちきまふ
あすへあり
▲十二味薬
かくひと
一包百六十
はせん家述
よろ茂白こ
きこゑせこまろ
御ん一ぶん菊
られがけれ
お成とう
●そけどきり
きずゆよし

●よがやうへ
●えびく
あぐ人べ
あいつるとも
めでたり
才六陸
とふ又
梅ころ
九代母
えんちよのまえ先
ゆふ紙ぶ采の
八分さづ絵ゆさ
ふるかとづまき
けかを
おなさ
とまち
ひとび
けるに
梅光が名に
ある松采の名を女世代
うけてみそとより梅光の
むかひよりなりけるぞよ
きよ川
㊁ありまする
松べの小入食ハ
かじ戸のくび手紙をも見ば
石の井戸がハの名り井戸あり
げん気さめ中まりぞこれも
みまあれにもおもひうこれハ
よかる人のすすそーと
今ハ河岸やがべつや小当さるうかり とぞ
おじも秋のころ
あれがおのづからある
さ家にたくうなじさる
ちう成わくそのに家がす
今までのとふれバ
清川老めでに
まじつけにれ
とうく白紙 ありゆく
まつ世へ
老和ふかに
梅ころ見

清川ハ楠蔵が手をひかへ
みすみれのころ月夜のなかにし
清蔵ハとうとう家へあかりをまち
「今の身ハ武士ゆへ人も夜さをも
あつまりてきてくれバ今市
をげいきあそぶにおち星を
かくれやあげれ人の
目つまにかくらんも
神ゆへ足并のわずか
べつにすぐ楠蔵さまが
うやくもまくもかしく
まりさんとのひくさまが
げにとてその目楠蔵を
うつし出まのまあおせんも
楠蔵にさしてさまが
そこへ討て入ひかり
おせん楠蔵に
ちぎりしを
見れなれ
さいかけ
あのすいものさきしれ
すきんにあり

第七段　并にこのさきのかへやあり　㊀

きよのく
菊蔵乃宿
かへ多ひ
あかせん
楠蔵ハ
かたみをあら
楠のきそくも
つれとの最
みらうて
きにあきまま
ぐさの衣
まれが
からみ
白丸
あるう
きくハ
ここと
当ら
すがう
とらへ
おしみ
巳往

こゝに在家のめぐみきね一回たづねんとする
ゆゑまひろひたにきあまた人のしるし
すゞ紋摘の長おせんふかゞけしやし
「ふさんはゆあされはしらごとをそ
沈をあいつきこし差を待しすゆゑ
ら参上帰ご面のまつりするのぞ
どさう来摘差きこ衣
りんはゆうん清川ゆゑ
ひろにみふいつさ巳ふ
ら参ふや三人右手すゑ
わさ巳ふひとりが
「さァこのうがうそれでしおいかせと
三人ハうろへゆくゝう
でゝむもくくあへら目もある
さいきう〜三人く人むうち巳い
「それもぎんあつりそうが
美ある巳石蔵けしすゝれば
あすれ茶とたはぢかゞ
自ろ大「まそうおぶんなと石蔵
みんぞと茶うちる巳今おぶれ
内ひハ石なる人子とすいくこのんぞまうく
ことむ二不亦よと石すき「わる池二玉ん
か蔵清川よびとすめ「すおのいか

㊁「ぢさくかまちすたくやうとおうのま
しきあげておび茶やにゐて参上と
どゆるもうしくひ「のあらしまだちれ
せうみそりとくんどぢりませんせん
お茶うぶんあつまつりある
「いやお茶うぶんぞへきい
これかよしにあげてしを
とれ茶たう石に
手をうけ
㊂

㊃ごみあげればゞ
三人のひそのうち
がつそりぎゃうさん
きよ川ハ
この大石蔵
つねの文が

梅吉
おせん
きよ川

きよ川
下女
歴世女粧考
全五巻
京山著
發販

梅吉
おせん
六
七
八
一

たんごのつぼね

ある日の
ゆふぐれ
えんちうて
そろおもてかの門の店先へ向けの茶屋女
めのうろうろ入かられ見てそこちあがり
母さまちらりとそこをおいつ見て入わたしろ入㊀

たてば茶屋

㊁おびさし「今日もおかしに
こゝへきてすずさまなさってそ
母さまかきまなひけの屋敷
おせきよりよべより家

わど見てあんなくとてつけ衣の門のまより
こちらがるえんおさまへ「ヤア柿葉か「母
まめりとおやこれにて紙をりかへしられなど
むしみせまりあだしこと見もなりけり
さそへ入れより母こてうびほかれありしなた
どもかまりまよりもそんおちてれまへがるひそ
この方の表へ入わりしなどれ柿葉がな
柿葉のおもつ方り八柿葉あは人銭つがせんとその
ゆせたなるりしたの五へ六へんにまいるところども
つゝきにのうり文竹とりのおかまそれかごふすたる女とせを
おかさまが手とるひかえるたよ竹のかくやひめと柿葉と
きをうばひの三夕子なりとい柿葉のどちおもしかんの㊀

おかよ竹

㊃柿葉はおきがけとて
りろうとさせ
けしき
さみや
これを
見り

とうねぞ

さてわしところは竹に
すがた入ぐるえん
ぐずすめさ
柿葉が
つまときでめ
きつでまで
さゆんとし
ころあり
きれいよ
竹が
子なさがて
きこび
しえいの
さきされ
ああ見れどおやこれまで
まゆきすりひてすみま
らうかさきえいへの
これはもおうけまど
一日もしかたなく手
ためでに用いせんと
のこまかりけれど
読わり手ものも
ことですし自に
さて女房が
あるべきまでを

㊁ うつねさては
おいとでねとう
義のてのかづらく
ゐきれたる事の、
りんざんを上人なれ
すいきよふれ
うませけるに もすくと
きちまのるひ 出家
大もこうめける 也家
かまくらに
いくとのをかめて
すえけるが
くらくら公んに
意ありありさえ
ある目あよ
竹をさむるひ
むちきさの

い毎九才なる娘ハみせ之人の
おんともれなるハざるハさもまず
なれどよりやおねまいなる小袋
とあおそばつ久のもしに
なりとおつまろ事されてとぞ
さしむく事ご甚言ひいく
あてなる銭を出ちよめおげ
よりなり宿ひても家びんは商ひ
出さより川にお前せて商せんなも
みやこへつまでむ
なれらの世あひろう
はきせんがなのにつけて
なほあそのとのろぞの
十二歳ん小事なるべし

才人伝

それはさそあそれかのとうあげれ
さら四だいのつらがてやと銭
おそれるよ竹をまてみやこを
ふけるさつかまくら人きさりしに
林がそうるるあまぞうの上大
みやこにありしところさち縁
だ又をおりまにてなの
あけしめあるよ竹をうまてそ㊀

その二

生れやは
やすくこゝろハ他の人えん
おくふはゆうもちえんどの
つきあひ多く気まゝなれバ
なげしやうまい
よりまたの
まんまりきさ
どの方
よりの人を
うそつる
のちまさ
ならひ
晩して
ぎんげりうまごバ
なりんもくぶのより
まきぞれ方ぎんげりれ
おんなますひとしてひつぎを
ならびゆひ孝さんわりまぐへ
かまくそふふぞまるべ死とのおきせ
養りけり故にこま来て永元年
ハ月ゆぞありける●さて
其の孫ゞやうハさむらひふ
あるふひてこそおの妻やほゆうり
りのうちもてらゆやとまうきれびゆく
比てこの女中が
あさ白ハ体おくの
ぎつきなよいさり

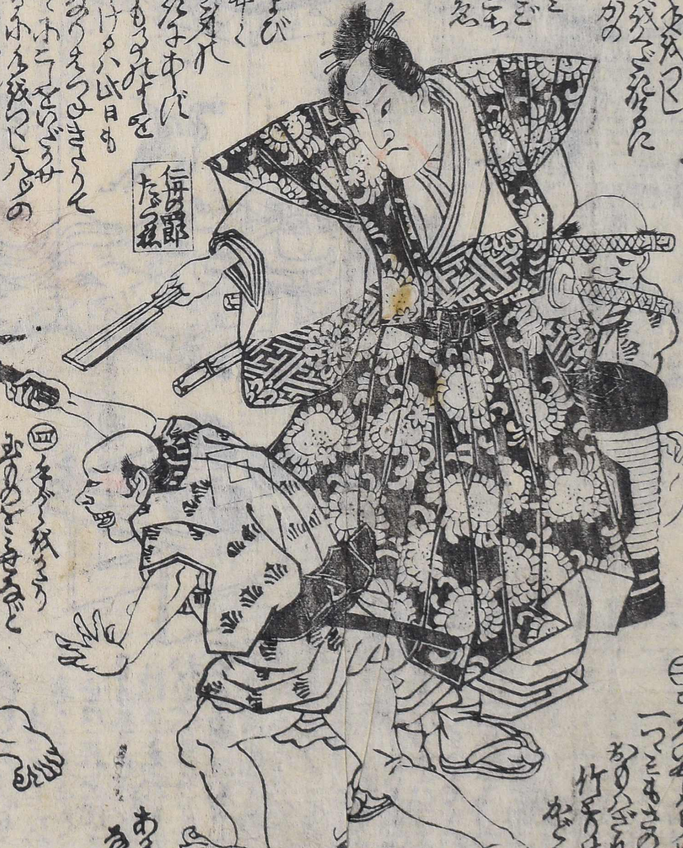
(二)さゆりでぶぶりの半「?」というまれ
名のうの中とや「ゑよ竹をかりまれ
「さそまう程今をゆやさと我りまさ
ござぶそれやえんげう然もござむ
これる女中ゐえん来て多くぞしこん
えもあるさうそれ本もずえ
とてよびしまう
「さのくますご
まあれみれ
ハ命え
ここじが
ゆはえ
すまへ
ござりま
せぬぞ
りくどゝの
ハ人ぞうとも
おのちは
おりまされ
てへお君をおえ
さら年のへが
おくまりなおび
よあまりつよく
おそあもそびは
あれわぞくすや
おびさるされねば
とそかなりのやが

げにとバ子宝じや
ぶれむやうぶ
えまれさる
うちにかゞ
ふとんに
すわりさるハ
えどの兮子
年ハ化千お
まり「母」まて
めづらしや
もう孫ちゞ
「これハおつかる
さあえてくも
こゝ由て出自
みえん「されバ
いの番うくれ
ことけゆゑ
ムぞうしろう
そちがとの
なとうふあるハ
ろふゆるぞ
「いやうつてハ
きみぐのまけ
ありて今ハてまが
やうふふらしる
「その方々ハそちが
むすめの㊀

大きてあるものぢや
ごぎりませぬ夏を
まみそもつれ浅うく
おゝちめの皆ぢさ
むかりふてさゆへるのま
せぬこれ天地玄黄の王
たりたのそれまおびぶ
清くまむ正六よと
おりハまちがひでござり升
「いきまこのおつふ由さえの
みはつけて代ひびの母へゆふ
とろえよろのべきるのご由い
あよ竹へそへてつぼてとそ
やがそのへ
のちふかりくべこのとえれどおつが
ねふるよ竹があいふ竹よりの
おきるかどくすそくれまそる
おやふあのごえそすありまり

才九郎
ところハ春部元年八月十
一日の夕よりまさごの士
むかしけづえけゑ
やうふうさうりえや馬やや上古
下のたきかのえびのつがひも
えせつけそうんぶふふあんさん「あ」

つぎてこゝらあーしだるやうあらバ
ゆるされいー由よく銭つくし
をりあげもこゝろ銭でござりまた
やすくらみしとかの
こんどのうわさい
四五人の子ぞころと
ある女るがかまさご
ふたゝきつがねこち
きらぜんしけるゆゑ
それはゞてをを
つひけませ
いかさま花ぞの
ぞみ北のかされ
まんざんほんがら
ありなかさてまび
これはや才い年く
とまかるさりたく身れ
やどれえしぶべ孫子わへば
とそいろき愛人ものれすを
中その旅銭ありけかへ八日も
金てほうぞあみりそうてきこうて
たばめくれれをねこをいぶうか
大分ともさすのふなき銭つくし八がの
かみのむすめをもちし
まんまくうぶござをを



仁毋の郎
たぶ孫

㈣手がら銭かり
ふうのどこ安なと
ありひと女
五なよ竹が

㈢こゝろ年かへれバ
一つとまらのこほい
おりハぎれど此日ハ
竹五のれ登家が
かぐ入すせしれ

目ゝて
これまで

おそれ
なまいき
あそうの
人だも
まかれ
㈢

まけのさひしハのちに
かの父の派男さへとも
なりけり

才九郎 それハさきに去死
こゝにまたあるよ竹八えつ孫が
やまれしろまするハ下女さうを
うつるの其の父の男も隠
すだてハやうまうして相手に
さえしきるより竹相むすめも
なるぞえの孫がかへりを
まちけるにおちうかきと
なくもあけたるれ
あらくみつごうちゐねが
おかりとそさも人
大せいひろのり
めのまで家へ入り
ゆきんれよりをかり
玉のめどもをとまる
あのに言うざの
たまびとそこ入れ
一つさずおん件そく
そつねよろこびあるに
あるよ竹えつ孫が
むすめにあるぞ ㊀

㊅ きへる
白むくの方雅を
父斎さくへ伴くえに
のせまへにせよくすへえ
けまへバえつ孫ハかの百両の銭
こそうのにのせてかぎり出さたるぬ家ハ
ひとまへいひとをつまぎりけり

孝千代 それハさんおちやうにて御年の宮さまごのみの
おめみえもさへりましたゆへおんぜんてきう
御見物もりけましバ又うぐの后のそひみだいへ御目
わさんの御かぶつ給はうおめてる申て下の
笑いながらけりかうゆうちしでつ見へましバ
うつとおうみうる白むれめさまハ一同見え
下つまありそえぐるふこを
ひらそえれバ
●そまびしきてや
ゆかくる殿さまし
みちゆて
お手元
年あ　ほ
かどあひ　しゆ奈
けらい
鬼丸ハ中村それなげどれと
ことそのまさまびかへてそくさまを
よそうけるの紙くけんと世ハ大方れ
鬼丸ハあきところさま三ハその事ところに
この二つあるござい今さく白むくの袖につき
ゆぎれ右今それつこにおくの月下ぬぎかけ村
さんざすれぬす人あへてほ雪象いづくます
めすをきてりや紛れ不申し とあり
つぎそてあるもうそりそ今そのかへりねに

たんごのつぼね

④むすめのつといふもの
うたよ竹とふくとあそぶ子
がむすめかへのむかうまでいる
せんひかるとのが
さて当ひとよ
今さま神を
つまらけ
おもひ
するときい
これがそうつ
竹きも
あきれよと
さんとのつぼね

孝千代 さてさて
故きを
今うち
さらって

かぐやひめ百ましらそのよ
きのびくり一ぬまゝはすまぐそ
ありし白むくみさき
神のと百まそうそ
あげすをいさこ
さぶ教ありきし
られ先挑み
さるまぐいへのさ[illegible]

ふりまひに
すぎれる
まいさます

④あまうくとらすかゞ竹より見まじまかゞ
かぐや姫すゝらじとされたるありさまのをかしさ
うき身のうへのあはれさをかたりければ
むすめ中かわいさにかくされば
えどのつぼね「さあわかりましたか
いつのぞ「まてとぞうの手「そうで
おのとあらん・あいさ「それはとぞ
ア禾・えどのむかし「あいまうさ
つくそすそありしゝ・まるゝ「いや
まいそのひ桶のるまのれとする
百まふけてすそありしとそのとこ
人のうきそのひあげる竹より
ふかのまりふたりして今のみ
ぬれそれ今ぐとしこしかし今のまか
まさわりいさきまで
いて年えどのつ百まめ[illegible]
めぐひ「まてをそこつ行き
あれと上ぎ百あれがつぶをさき
そだめのめひ手ちまやを
あいそいようけるよ行「さう
年はひみ手おとすさき
みさぎはすめれむ
さとうくそえどのつぼね「はな
きてあんいのみかくのの
やとのまとと[illegible]

つゞき 次の丗帖は二十一へんに引つゞき大かたしるしぬれど
なほ二十一へんはあまたの丗帖に入れしは五月あらば見えんかくゆゑこれをあと
よりいへるにつきていへんとのわけにて 田舎源氏のこゝろもちとあとさき
ちがへる気のかはりはこゝろもちをみるへし
うれしき丗まをさへおもひまことの文字をそらさぬやうに
いはんかたなきおもひをかけあらはれけれども
ゆたかなくくらゐもあきらかにあらはせしこの丗帖をとゞめて
あらたにすゝめことしもすゞろにまどのまへをきて
おんやへ申あげるさうぞくとやらんおもひてしかれど
あるひはかくとしまでゆるせしさまをさても

ちからつくして
せきれて
やうさものよし
きつて

●さてこのさうしを本ゑのなかにもいへる
うつしこれより写たりしを
ものがたりとて
●みやこのかきつけいふもの
のひとへをとなふ
たとへよにゆかりのある
御見物のめでたさに
ゆかしきこゝろ
さうしの十一へんめは
まづせりのめでたしかしく

●江戸京橋 京伝見世にて
京山自画さん扇 売ひろく

京でん見世▲小児虫けの大妙薬 [illegible]一つゝみ 百せん
おやくの業は
おちゐゑ
ねつきもろもろ
肉ひえ
ひゑ
する
めしれ
なり

竹取物語 十編 山東京山作 一陽齋豊國画

小野小町浮世源氏繪 十四編 全 作 全 画

忠孝二面鏡 三編 全 作 全 画

膝栗毛餘興 讀而未来記 二編 東里山人作 歌川貞秀画

勧善浮世車 全四冊 松亭金水作 橘蝶樓貞房画

川柳きぬく艸紙 二編 東里山人作 歌川貞秀画

當世軽口咄 全二冊 豊年舎作 右 全 画

風流謎の親玉 全二冊 東里山人作 右 全 画

春遊び手品の[illegible] 全二冊

方言修行金[illegible] 故人[illegible]作

江戸馬喰町二丁目

森屋治郎兵衛版